

落第、翌年は仮及第（2・11・17）

和田 洋一（昭2・文乙）

今ご紹介を頂きました和田洋一でございます。簡単な自己紹介をする時に、私の場合はどうも簡単にいかない。例えば、三高へは大正十年、十一年には入学試験で落とされ、十二年にやっと入学しました。三年間経って、大正十五年に卒業しました、と言えたらいいのですが、私の場合は進級しぞこなったので、大正という元号は昭和に変わってしまった、昭和二年三月に卒業しましたという事を付け加えます。落第したと言うと格好が悪いので、何故落ちたかという事を言わんたらんような気になります。それから、私はクリスチャンで、キリスト教の家庭に育ったんです。キリスト教ですと言えば一言で済むんですけど、どうも私のキリスト教は注釈をつけないといけないような、つまり普通のクリスチャンが持っているような信仰を持っていなかったのです。ただ父や母や祖母や伯父さん達が皆んな熱心なクリスチャンでした。そういう環境の中に生まれ、特殊な環境の中で育ったけれども、まともな信仰らしい信仰は持っていなかったというふうな事

を、一言言わないと誤解をうけるというふうなこともあります。

父親は、私が小学校を卒業する時に、同志社中学へ入れと命令的に言いました。これも補足説明が要るわけで、私の親父は、東京帝国大学文科哲学科卒で、それで同志社の先生ですから、そういう家庭の息子は、小学校でだいたい出来がいいわけですね、私も出来が悪い方ではなかったのですが、それが私立学校の同志社中学、ここはもう無試験で入れてくれるわけですよ。同志社中学へ行くと親父が言いましたので、私は少し不満で、子供の希望も聞かないで、親父が一方的に決めるとは何事かと思っただけですけど、しかし、京都府立一中というと、ここはむつかしい試験があつて、受ければ必ず通るわけでもないし、落ちたらみつともないという事もあるわけですね。京都府立二中は、ずうつと南の方にあり、七条よりもまだ向こうにあつて、ここは遠すぎるといふような事があつたりして、私自身も、どこの試験を受けようかと迷っていた時に、親父がそう言うものですから、ウーンちよつとばかり不満で、しかしまあ同志社中学へ入りました。同志社中学という所は、クラスメートが、あまり勉強しない空気です。それに同志社中学を卒業して、三高へ入るといふような事をあまり考えていない連中ばかりですから、旧制の高等学校、あるいは専門学校へ入るつもりで予備の受験勉強をしない所でした。私の親父は東大哲学科を出たつていふので、明治の初めのことですから同志社当局からは特に大事に扱われていて、それによって一方では熱心なキリスト教徒だったんですが、それで、長男の私に同志社中学へ行けと言ったん

ですが、あんまり命令的に、同志社中学へ行けと言った事を、親父は反省したのかどうか、高校の時には三高へ行けとかそういう事は言いませんでした。勝手に私の行きたい所へ行けというような調子でした。

私の時代には、中学の四年生から旧制の高等学校の入学試験を受けられ、点数が良かったら入れるというふうな事になっていました。私は同志社中学の四年生の時には、四年修了で三高へ入るといふ、そんな厚かましい事は考えておりませんでした。卒業した年に受けて見事に不合格で、それで、その翌年、今度落ちたら格好が悪いと思っただけで、又落ちて不合格になりました。母親が大変嘆いて、どこか地方の小さな町の高等学校なら入り易いんだけど、身の程をわきまえずに三高の入学試験を二度も受けて、二度共落第したということを大変嘆きました。それで、三度目はどうするかという時に、私は二度落ちたんだから三度目はどうしても入らんなんという気になって受験勉強に精を出し、大正十二年にやっと三高の文科乙類に入りました。

私は数学、物理学、化学、生物学、生理学、こういう科目はみんな苦が手である。つまり理科系は向かないと自分で判断し、それから法律、経済、これも何の興味も感じない、そうすると、どうなるかと言うと、英語の勉強はそんなに嫌いではなかったので、英語ならいやでないと思って受験勉強をしている時に、ドイツの劇作家、ゲルハルト・ハウプトマンのドラマを森鷗外の訳で読んで、ドイツ文学はすばらしいなあという気になり、そういう事で、ドイツ文学志望に決め

たわけです。とにかくそんなふうで文乙にはいろいろと決めておりました。三高の文科へ入りますと、数学というものを強制的にやらされる。三高へはいった時は、ドイツ語をしっかりと勉強し、大学ではドイツ文学を専攻するつもりだったのですが、三高の文科乙類へはいると、数学が必須科目になっていた。私は数学を勉強しても、ドイツ文学専攻のためには、何の役にもたない。それに数学の教師の態度が高圧的だったので、私は反発し、ドテカンというあだ名の数学の先生を怒らせるような態度をとったので、数学一課目のために一年生から二年生への進級がだめになった。

そんな次第で、大正十二年に入学したんだから大正十五年には卒業するはずが、昭和二年の卒業になったという事なのです。これだけ説明すると、私の方はすっきりするわけですが、皆様はつまらん事を言うとお思いかも知れませんが、しかし、大正十五年に卒業するのは、昭和二年に卒業するのでは、いろいろな面で影響する部分が変わっていたと思います。

私が入学する前の年に、金子銚太郎校長を排斥する三高の学生の運動がありましてね、これはまさに大事件であったと私は今でも思っています。それで大正デモクラシーを象徴する事件だから、あの事件は、もっと大きく注目されるべき事件だと私は思うんですけども、どうも思想史家あまり重大視してないと、思われるんですが、いろんな本を見ても、三高の大正末期の校長排斥事件、あるいは金子校長追放事件、三高生の同盟休校事件、といろんな風に言われておりま

すが、私はその事件が終つた翌年に入学したわけですね。大正十二年に入学したのですから、前の年に落第せずにスウィーツと入ってれば、私は金子銓太郎校長排斥事件に加わっておつたんだけれども、その事件があつた時には、私は受験浪人をしておりましたんで関係はなかつた。私が入つた時には、二年生、三年生の諸君は、三高の自由を守るために、自分達は校長を追放したんだという事で、非常に自信満々で、僕等新入生に、三高は自由だと胸を張つて、自分達が自由の敵である金子校長を追放したんだと言つて、威張つて話をしてくれました。私はあの事件の終つた翌年に入つたんで、一年前に入つてるとその当時の事件に加担したという事になるんですけども、残念ながら、上級生から、手柄話のようになつて自分達が三高の自由を守つたんだ。自由を尊重しない金子校長を放り出したんだと、そんな話ばかりきかされました。

「自由」というのは、実は私自身は同志社中学で身につけていたわけです。同志社中学、新島襄の創立した同志社は、自由な学園だと言つて威張つていました。しかし、クラス会をやる時に、酒を飲む自由は同志社にはないんです。それは同志社を創立した新島襄が、酒は学生には飲まさない、酒を飲んだ学生は、同志社を退校させる。放り出してしまふという厳しい学校で、それで県人会等がある時に、私の場合は山口県人会で、すき焼きに酒が出ない、同志社は残念ながら自由な学園だけでも、酒を飲む自由はない。諸君我慢してくれと世話役が言うような事で、私は我慢をするもしないも、キリスト教の家庭に生まれましたから、酒を飲む気は私にとっては

全然なかつたんですけども、酒を飲みたいという連中は、自由というものは奇妙なものだ、同志社の自由は妙なものだと思つたんです。三高では、酒を飲む自由はあつたわけだし、入学するとすぐクラス会があつて、楽しそうにみんな酒を飲んでゐる。僕はクリスチャンだから酒は飲まない、そうすると、次々にクラスメートがやつて来て、君は何故酒を飲まんのかと、皆が酒を飲んで楽しそうにやつてゐるのに、君だけ一人なんじや、付き合ひが悪い、とボロクソに言つた。僕の方は別に飲みたいとは思わないし、平生飲んでないし、酒は悪いと思つてゐるので頑張つて飲まない。そうすると和田というやつはクリスチャンだから酒を飲まない、と、クラスメート全部に徹底するわけですね。僕の方からは言わなくても、皆、和田はクリスチャンだから飲まないのだと思つてしまふ。

マルクス主義が三高生の中に入つて来る。社会科学研究会という組織が学校の中に出て来る。普通なら僕の思想とか、僕の信仰を知らないはずだけど、酒を飲まないという事で、僕がキリスト教だという事がクラスメートに分かつてしまつてゐる。それでマルクス主義学生は、カール・マルクスは宗教は民衆のアヘンであるというような事を言つてゐる。和田は教会へ行つてアヘンを常用してゐる、あのキリスト教をやめさせようじやないかという事で、マルクス主義で社会科学研究会の学生が、入れ替り立ち替りキリスト教なんかやめてしまへという調子でした。そして僕が、お隣の京都大学の文学部に入ると、いつの間にか和田はキリスト教というようになつたらん

宗教を信じている、あんなのはやめさせろという事で、又違った顔ぶれが僕の家にやって来て、キリスト教とは縁を切つて、社会科学の研究会へ入れという風な熱心さでした。普通の場合は、資本主義か、社会主義か、資本主義は悪い、とくに労働者を低い賃金で使つて搾取する。そして帝国主義戦争を追つぱじめる。社会主義社会だったらそんな搾取、帝国主義戦争というようなものはなくなる、というような事を盛んに言うという有様でした。

マルクス主義の本をじっくり読んでいると、確かになるほどというところがある。資本主義社会をほつたらかしておくことは確かに悪いなあと、私は思いましたけれど、しかし、私の場合は、父・母・祖母・伯父さんたち、その伯父さんたちの一人は同志社の神学校の教頭であつたし、一人は牧師であり、一人は教会の役員である、長老であるというような事で、ぼくのまわりはクリスチャンだらけ、そういう環境に私は生きていたわけですから、ちよつとやそつとではクリスチ教の世界を脱出出来ない。赤岩栄という牧師は「キリスト教脱出記」という本を書きましたが、僕も脱出しようと思つたんだけども、^{とえ}十重^{はたえ}二十重にキリスト教にとり巻かれているという感じがして、なかなか脱出出来ない感じでした。それで年をとつてから、七十を越えてから、私は自分の青春時代・中学時代を省みて、キリスト教とマルクス主義とが、あいまいなままで共存しており、クリスチャンかマルクス主義者か分らん様子でもあつたので、年をとつてからの私は、それをはつきりさせなくてはいかんと思つて、本を一冊書いたんですね。

考えてみると、三高入学おめでとを言つて、私にお祝いの品をプレゼントしてくれた青年が室町教会にいた。その青年は私と同じ室町教会の青年会のメンバーで、京大経済学部で学んであつたが、彼は私に入学祝いとして恩師河上肇先生の著書『近世経済思想史論』を私に手渡し、「和田さんは文学青年で、小説類やキリスト教の本はよく読んでおられるが、たまには思想的な本、経済史の本も読まれたらどうですか。河上先生の本は、わかりやすいし、文章もみごとですから、ひまな時に読んでごらん下さい」と言つて、私に「思想史論」を手渡した。私は、せっかくの厚意だから、読まずにいられないような気になり、手渡された「思想史論」を丁寧によんだ。

自分はどちらかと言つと、マルクスの方に傾いたんだけど、キリスト教からどうも脱出しにくいというよな、そういうところでしたから、なかなかすっきりした本が書けない。その事ともうひとつは、マルクス主義を勉強しているうち、マルクス主義はいいと思ふんだけど、首をかしげるようなところもだんだん出て来て、広い意味で社会主義はええけども、共産主義はどうも閉口だと思つたりした事もありました。そういう事で相変らず煮え切らないで一冊の本を書きあげ「私の始末書」という題をつけたんです。始末書というのは、自分の青春時代、中年時代を省みて、どうもはつきりしない。すっきりとキリスト教徒クリスチャンではないし、すっきりとしたマルクス主義者でもないという、あいまいなところがある。あいまいなままで、青年、中年、初老を過して来たという事で、自分で自分を卑下し、立派な青春ではなかつたという気持でともか

く始末書という題の本を書きあげたわけです。

それが今から六年前です。ところが、始末書を書いたんだけど、読んでみると、やっぱりはつきりしてないわけですね。僕自身もキリスト教は悪い、マルクス主義はいい、正しいというふうにも思えない。と言ってマルクス主義にもいろいろ疑問が出て来る。

私は同志社大学ではドイツ語を教えていましたし、雑誌や新聞はドイツの雑誌や新聞を読むというふうにして、ドイツがやっぱり気になっておった。ところが、戦争に負けたドイツは、西ドイツと東ドイツに、二つに分かれてしまつて、その東ドイツの労働者、労働者だけではなくて、一般市民、お医者さんとか、弁護士さんとか、いろんな技術者とか、そういう人が東から西へどんどん亡命して行くというか、逃亡して行くと言う事が日本の新聞の記事になつた。それからアメリカやイギリスの新聞にもちゃんと報道されている。それで私は、社会主義国の労働者が、資本主義国の西ドイツへ逃亡するとは奇妙である。特に、労働者の場合は、東の社会主義国から西の資本主義国へ逃げて行く。逆なら分かるけれども奇妙だと思つた。しかし、ニューヨークタイムスとか、イギリスのマンチェスターガーディアンとか、こういう有力新聞は、所謂ブルジョワ新聞ですから、ブルジョワ新聞のいう事もあてにならない。それで自分の目で見ても、はつきりさせようと思つて、丁度、同志社大学が短期留学を認めてくれたので、私はヨーロッパへ行つて、まず先に西ベルリンへ行ったわけですね。そして分かつた事は、東ドイツへ入ろうと思えば、左

翼の偉い人の推薦状がなければ入れないという事でした。私には、そういう推薦状を書いてくれる人の心当りがあつた。

その人は平野義太郎という治安維持法でやられて、東大の法学部助教授をやめさせられた人ですが、その人がヨーロッパへ行っていたのです。平野さんは僕が、京都で反ファシズムの文筆活動をやっていた事を知っていました。この人に推薦状を書いてくれと言ったら喜んで書いてくれました。その平野先生の推薦状を持って東ドイツへ行くと入国を認めてくれました。向こうは日本の優れた共産主義者、マルクス主義者の平野先生が、ちゃんと推薦状を書いてられるのなら、どうぞご入国下さいという。これは別の言葉で言えばコネですね。共産党の偉い人が、この男は大丈夫ですと言えば入れてくれる。東ドイツの一般市民は「社会主義国はコネが多すぎる」と言っているのです。例えば京都から大阪へ行くのに、党の事務所へ行って事情を話して、了解してもらって許可書をもって大阪へ行く。東ドイツでは、ライブチツヒの町から、ドレスデンへ行くのにも、それをいちいち党の事務所へ行って説明をせにやならんという事でありました。そういう不愉快な事がありました。

私は平野さんという有力なコネがあつて、東ドイツへ入っていい所をザアーツと向こうが案内してくれたわけですね。私はお客さん扱いされて、ホテルに泊めてもらって、向こうの案内してくれるとだけ行っていたのでは東ドイツの本当の姿は分かんと思つた。これは普通の市民の

よくな顔をして、もぐり込まないとダメだと思った。毎年10月頃に、ライプツヒの町の、本の市・書籍の市があつて、その時その一週間位は、自由にどこの国の人でも、どんな思想を持つてゐる人でも出たり入ったり出来る。私は、そういう時期にもう一度東ドイツへ入り直した。今度は一介の労働者の家に泊めてもらいました。労働者の、30歳になるかならぬ若い奥さんが、僕を掴まえて話をする。それで僕は京大でドイツ文学をやり、同志社でずうーっとドイツ語の先生をしていましたから、ドイツ語は何と分かるわけです。それで、ライプツヒの労働者の奥さんは、僕にドイツ語を話して通じるという事が分かった。そうするともうすこい勢いで東ドイツの社会主義の悪口を言い出しましたね。それは平生のうつぶんがたまっておつたので、それはえらい勢いで僕を掴まえて、社会主義国には自由がないとか、それからトマトひとつ買うのにも行列しなあかんとか、そういう主婦らしい、日常的な不満を、僕に並べ立てて、自分と同じような不満を持っている人が近所に住んでおる、そのおばあさんの話を聞いてあげてくれと、家を出ておばあさんを連れて来ました。

そのおばあさんというのは、日本の横浜に長いこと住んでいた。そのおばあさんと若い労働者の奥さんと、二人口を揃えて東ドイツ、社会主義のドイツ国の悪口を言いましたね。私は東ドイツから西ドイツへうつるのは簡単なんですけど、西ベルリンに住んでいるドイツ人が、私が東に一週間滞在したのにびっくりしましてね、我々ドイツ人で西ベルリンに住んでいる人間は、東ド

イツへ行けないと。まだ壁がなかったんですよ。それに日本人なのにどうして行けるのかと。私はコネで行ったんだと、そんな事は言いませんけども、有力な学者の推薦で入れたんだと言った。しかしドイツというのは奇妙な国だ。ドイツの国なのにドイツ人を入れないで日本人を入れている、そんな事を言つて西ドイツの住民は怒っていました。

それで、私は日本へ帰つて、東京に三一という左翼的な出版社があつて、社長や専務は同志社の出身で、僕はよく知つてゐるんで、それが僕に、東ドイツ、西ドイツの自分の目で見て来た事を書いてくれと言つたので、私は先申したような、東ドイツの若い労働者の奥さんが、えらい勢いで悪口を言つたと。ライプチヒの町を歩いていると、急に軍人がバラバラと大勢出てくるんです。それはソ連の兵隊なんですね。東ドイツに住んでいる労働者は、ソビエト兵隊の事をルツセンと言いましたね。ロシアの兵隊が、自分らの国、東ドイツへやつて来て、演習をやつとるんだと、不愉快だという事を僕に言つた。そういう東ドイツで僕自身が体験した事を三一書房の「三一」という小さな月刊雑誌に原稿を書いたんですよ。京大の島恭彦さんとか、同志社の憲法学者の田畑忍さんとか、三、四人と一緒に、僕の原稿が並びましたが、僕の原稿には、東ドイツの弱点が書かれている。それで、早稲田大学のドイツ文学の先生で、舟木さんという容共インテリだった方が、京都へやつて来て、僕を掴めて背中をたたいて、「和田さん、東ドイツの弱点を原稿に書いたりすると、喜ぶのは日本の反動だけだ。東ドイツの悪口を言つたら、西ドイツは

喜ぶかも知れないけれど、和田さん、そんなつまらん事はせん方がいいんじゃないですか。」と言いましたね。早稲田大学の舟木先生という方は、僕より年が上で、ハイネ論を書いたり、ゲーテ論を書いたり、立派な学者として認められている先生です。この先生が、僕につまらん事を書くなというものですから、僕もちょっと閉口して、「はあ」と言った。東ドイツの弱点は確かにある。しかし、それをあんまり雑誌や新聞に紹介すると、社会主義は悪いというふうにとつてしまふ日本人が沢山いる。遠慮した方がいいのかなと、ぼくは少し弱気になりました。

同志社で講義をする時に、同志社の学生の中には左翼、共産党の学生がおるわけですね。そういう連中は、僕を左翼的インテリと思っておる。その僕が、東ドイツの悪口を書くと、いろいろ悪い影響がある、嫌な顔をする。それで僕の方は、やはり東ドイツの弱点というか、社会主義国、マルクス主義の弱点をどうも言いくいし、あまり言わない方がいいのかなあと思った。また僕自身は熱心なキリスト教徒になれない、キリストがいったん死んで、三日目に又蘇ったと、これは信じないかんのだけ信じられない。しかし、そんな事を教会の牧師さんの前で言いくい。僕の親父にしても、東京大学哲学科で勉強した人間ですし、平生同志社の学生を相手に講義をしていながら、いったん死んだイエス・キリストが、又蘇るとは、学生を相手には言いくいわけですね。言えない。しかし、そこは適当にやっとなるわけです。私もだからまあ、クリスチャンのような、マルクス主義者のような顔をして、はっきりせんと思つて自分ながら煮え切らない。ど

うしようもないと思つて先程申しました『私の始末書』を書いた。

それから出版記念会というのがありまして、その時に私を擱えてですね、戦前・戦中のことは正直に書いてあつてよろしいと出席者は申しました。しかし戦後、社会主義国の北朝鮮、東ドイツ、ルーマニア、ハンガリー、中国と、そういう国へ行つて幻滅を感じたというような事を、僕は親しい友達にこういう会ですら平気で言つてゐるんですけれど、しかし、出版物とか、朝日や毎日を書くとなると読む人が多い。牧師さんも読まはるし、共産党の諸君も読むというような事で、そこら辺でちよつとあいまいになるわけですね。

始末書を書く、始末書を読んだ僕の友人達はですね、戦前・戦中の部分はちゃんと書いてあるけれども、戦後はどうも齒切れが悪い、戦後は一応事実だがお粗末過ぎると、それが東ドイツのことがピシッと書いてない。ことに北朝鮮のことがスツキリしないという事を言われましたので、私はその通りだと思つて、続編を書けという注文が出ましたから、続編を書きますと言つて、それから六年経つてゐるわけです。まだ本が出来ないんですよ。毎日机に向つて私は原稿を書いてゐるんですが、なかなかさあーツとはいきません。書いてはこれはあたりさわりがあるとかでなかなか進みません。

今日はいろんな立場の方がいらつしやるんだろうけれども、何かついい気になつて本音をしゃべつておりましたが、実は私はその本をちゃんと書かないと死ねないわけです。それに出版

の責任者が東京からやって来て、まだ出来ませんかと催促をするので、年内には必ずやると、言っているんですが、そういう中で、井垣さんから今日何か話をせよと言われ、そして、今度はみんながはっと思うような題にという事で、こういう奇妙な題にしました。

私は自分のキリスト教的な信仰と、マルクス思想と社会思想をはっきりさせて本を出して安心して死にたいと今思っているわけですけど、なかなか出来ない。過去の思い出となりまして、どうしても三高時代が入って来る。三高のクラスメートが入れ替り立ち替り僕の家へやって来まして、キリスト教を止めてしまえと言ったのです。私はその後、アルコールは飲めるようになりました。アルコールは私はビールをコップ一、二杯でピタッと止めるんですよ。それ以上飲むと酔っぱらうかも分からんし、もう本なんか読めなくなるかも分からんし、あるいは、女の人に抱きつくかも分からんし、いろいろ不作法するかも分からない。私は三高、京大の時は酒は飲まなかった。今は飲んでいます。これはちゃんと理由があるわけです。ビールを一杯や二杯飲んだって何の害もないですね。飲みすぎるから害が出て来るんで、コップに一杯、二杯飲むと美味しい、気分も明るくなる、何の害もない、何の害もないのに飲まないと頑張っているのは、あほらしい。飲んでみて口当りがいいと思って、私は飲み出した。私は87歳ですが、本物の老人ですね。友人達が私の顔を見ると、長寿の秘訣はどうだという事を盛んに聞き出します。こういう事を聞かれ出したら、もう年をとったという事ですね。その時にビールを一杯か二杯目でやめておく事だと、

こう言うんです。そうしたら、なるほどは言いませんわ、友達はね、そんなバカな事が出来るか、ビールを一杯か二杯でやめるといような事が出来るか、そんな無茶な事言うな、と友達は言いますね。私は出来る。ビールは一杯か二杯でいい気持になって歌でも唱おうというか、いい気持になってやめておくと全く無害です。

キリスト教とマルクス主義となると、どうしても三高時代が気にかかる。そして、三高一年生を二回やった、裏と表とがある。表の時からマルクスを学んだのか、いや二年の時から三年の時かと思えます。そして、私は学年末はいつも心配で、最初は立派に落第した。その次の時には仮及第だった。三高の及落判定の会議の時には、40点台があると及第出来ないですね。私の数学の点がね、奥山先生のが45点ついていたんですよ。そしたらね、僕を助けてやろうという先生がやって45点四捨五入したら50点になるとええ加減な事を言っていた。それに和田は去年も落第している、二年続いて落第すると三高を追い出されると、あんまりかわいそうだから、ドイツ語の点はええんだから、仮及第であげてやろうと、言う事になった。

三高の教授会に僕の親父の友人がおるわけです。その親父の友人が、僕の親父に「洋一君は仮及でした」といような事を報告するわけですね。僕の親父にも母親にも分かるわけですね、仮及という事が。それから、二年から三年になる時には、今度は化学が悪い点をつけられ「仮及」。それで最後の年は、今度は漢文が悪い点で、三高の教授会は一遍だけ落第して仮及、次も仮及だ

からもう上げてやれという事で、それを又僕の親父の友達が三高で教授をしている。その友達がちゃんと親父に報告してくれた。親父はですね、肝をつぶして、僕に曲芸は止めてくれと言いましたね、そんな事で僕の話の題を「落第、翌年は仮及第」としました。僕の父の知り合いというのは実は法制経済の山谷省吾という教授でした。

僕自身は、今キリスト教とマルクス主義とのそれぞれのあいまいさ、そのキリスト教に関しては、聖書のここは信じられんというふうな事を、教会で牧師さんを前にして言いにくいんですね。牧師さんも嫌な顔をされる。僕の親父や、ばあさんやら、母親が熱心なクリスチャンで、そういう家庭に育った者ですから、牧師さんもつい嫌な顔をされる。こちらもつい遠慮する。今日も嫌なお気持をされている方が一人や、二人おられるかもわからないけど、今日はまあ安心した気持ちで勝手な事をしゃべらしていただきました。

私は最初に申しましたように、三高で一生懸命にドイツ語を勉強した。数学の先生とけんかしたとか、落第したとか、仮及第になったとか、しかし、今書こうとしている事は、三高のクラスメートが僕の家に来て、宗教はアヘンであるとか、カール・マルクスがそう言っているとか、そんなキリスト教なんか止めてしまえと、こういったマルクス主義者が、実はマルクス教の信者であったという事ですね。マルクスに関しては疑いを持たない、マルクスは正しいとそう思い込んで宗教はアヘンであるとか言って、僕に責めてかかって来た。しかし、あの頃僕の所へや

つて来たマルクス主義者だけではなしに、京大のマルクス主義者も、それから今日のマルクス主義者、共産黨員も共産党は正しいと思ひ込んでゐる。そして、僕なら僕が聖書を読んで、いったん死んで三日目に甦る、そんな事は信じられない。それと同じで僕にキリスト教をやめろというんだったら、マルクスのおかしいところも指摘すべきで、それをしなかった。マルクス主義をひとつの宗教として信じてゐる河上肇大先生にしても、マルクスがこう言つたとなるとそれを信じておられた。この辺は僕は非常に不満ですね、僕は河上先生に親しみを感じていましたし、今でも河上先生の追悼会が法然院であると毎年行つていますが、そこへ来てゐるのは河上先生を偉い人だと思ひ込んだ六十―七十の初老のおばあさんが多いですね。思想のことなんか分かるはずがない。そのおばあさんが来て、河上先生は偉い人だ、自分の思想に殉じた立派な人だと思ひ込んで敬意を表して来ておられる。私はそこでしゃべろと言われたので、河上先生もマルクスを信仰されすぎた。もう少しここはおかしいと考へて欲しかったというふうな事を話しましたんです。法然院へ集まる方は、みんな河上先生は立派な先生だと思つてゐる人が多く、あんまり言うとな愉快にさせるおそれがありました。まあ今日もさまざまな方に来ていただいて不愉快な思ひをさせたかも知れません。

私にとつては三高の時以来のモヤモヤしたものがあつて、それはちよつとやそつとで消えてなくならない。そして、八十七歳になつて、それをすつきりさせようと思つても、させられるかど

うか分からなければ、最後に本音を申し上げる機会があたえられるだろうと堅く信じております。有難うございました。

〈追記〉

私の父、和田琳熊は、明治三年十二月一日、山口県厚狭郡宇部村に生まれたこと、明治十八年に山口中学に入学したこと、明治二十四年十二月十一日に山口教会牧師青山昇三郎氏より受洗したことなどを履歴書に書きしるしている。和田家が長州藩の士族であり、宇部村で儒教の寺小屋を開いていた家柄であることを知っている人にとっては、父の受洗は、小さな驚きどころか、腰を抜かささんばかりの大事件であったにちがいない。

塾主であり、琳熊の父であった和田梁亮のこうむった精神的打撃は、ちよつとやそつとではなかつただろうと想像されるのであるが、当人はともかくも山口中学を卒業し、山口高等中学校を経て、東京帝国大学哲学科の学生となり、京都にあつたキリスト教の私立学校同志社の教師となつた。山口教会で島根県出身のクリスチャン女性と結婚式をあげ、明治三十六年九月、私の父となつた。

その翌年、洋行する機会を同志社によつてあたえられ、アメリカ合衆国のニューヨークで、改めてキリスト教を学び、心理学、倫理学、教育学などの講義をきき、イギリス、ドイツ、カナダ

などの土を踏んだが、パリ、ローマには行かなかつた。そのことは和田琳熊の選んだキリスト教が、プロテスタント教会であつて、カトリック教会ではなかつたことを証明しているかも知れない。

和田琳熊は、生まれた男の子に洋一という名前をあたえた。洋一の一は、長男を意味していたことは明白である。十年目に次男が生まれた時、父は次男に「虔二」という名前をあたえたことによつて明らかである。しかし洋は東洋の洋か、西洋の洋かは必ずしも明らかではなかつた。

それが、西洋かぶれをして日本に帰つてきた父が、京都御苑の西側にあつたわが家を、すつかり西洋風に改造し、応接間、自分の書齋、食堂、台所をすべて洋風とし、書齋には洋書をならべ、日本料理、日本菓子には、いい顔をせず、日本服を身につけず、洋服で過し、万事西洋風を好んだことによつて明らかになつた。

私の家へ遊びにきた小学校のクラスメートは「和田君の家は、和洋折衷やなあ。和田洋一という名前と、和洋折衷とは何か関係があるのか」と私にたずね、私はその問いに答えられなかつたが、私の家風が万事西洋風であり、日本風のたたみの部屋がすくないことは認めねばならなかつた。

又、私の父には笹尾兼太郎という親友がいて、クリスチャンで、仙台の東北学院で神学や哲学を教えていたが、親友の和田琳熊の所に、近く赤ん坊が生まれるときいて、最初に生まれたのが

女の子であることを知っていて、二番目にまた女の子が生まれては大変だ、どうしても今度は男の子でなければならぬと思いつめ、仙台から京都までやってきて、男の子が生まれたことを知るや否や、両手を高くあげ、万歳を三唱したという。万歳三唱の話は、私が少年になった頃、父が聞かしてくれた話であったが、私はその話を聞いた時、生まれた私が女の子であったとしたら、万歳三唱は二唱になったのか、一唱になったのかと思つたのであるが、男尊女卑の思想は、大正時代のクリスチャンにもあつて、新訳聖書コリント前書には「女のかしらは男である。」と記されておき、人間はみんな平等であるというけれど、聖書にも平等ではないと記されているのだから、男の子が生まれたからと言つて、笹尾のおじさんが万歳三唱をしたのは無理もなかつたのかなあと少年の私は考えたのである。

(同志社大学名誉教授)